

日本語の四字漢語動詞の自他に関する研究

—N-VNタイプの四字漢語動詞を中心に—

劉 徳 駿
(国立政治大學)

0. はじめに

小林(2004:205)によると、四字漢語動詞は一般に(A)~(C)のように分類される。

- (A)「1+3」タイプ:再・活性化
- (B)「2+2」タイプ:法律・改正
- (C)「3+1」タイプ:大規模・化

さらに、小林(2004)は、(B)の「2+2」タイプの四字漢語動詞を(D)~(F)のように細分類する。

(D) N-VNタイプの四字漢語動詞(名詞的要素と動詞的要素で構成される四字漢語動詞)

例:法律改正する、意識改革する、地盤沈下する

(E) VN-VNタイプの四字漢語動詞(動詞的要素と動詞的要素で構成される四字漢語動詞)

例:通勤通学する、輸入販売する、指導監督する

(F) ADJ¹⁾-VNタイプの四字漢語動詞(付加詞的要素と動詞的要素で構成される四字漢語動詞)

例:空中爆発する、大量生産する、相互訪問する

従来、四字漢語動詞に関する研究は、小林(2004)に代表されるように、主に語形成の観点から議論されてきた。しかし、実際の用例を調べてみると、N-VNタイプの四字漢語動詞の類型は多様であることがわかる。例えば、以下のようである。

(1)また、「労働者階級の前衛政党」「社会主義革命」などの表現がある前文を全文削除する党規約改定を全会一致で、有事の際の自衛隊活用の容認などを盛りこんだ大会決議を賛成多数でそれぞれ採択した。(小林2004:219)

(毎日新聞2000年11月25日)

(2)プロ野球・阪神の元監督、村山実さんがそうだった。阪神の前回優勝(85年)の3年後から指揮を執った村山さんは、89年秋、試合後の球場で突然、辞意表明した。

(毎日新聞データファイル2003年8月1日)

(3)量販店の進出で、地盤沈下している秋葉原電気街だが、海外からの買い物客が多く、製品の取扱説明書を日、中、英、韓の4カ国語で表記した。

(毎日新聞データファイル2003年1月22日)

(4)博士は1935年インド中部ボパールに生まれ、52年に家族とともにパキスタンのカラチへ移住した。大学卒業後、欧州留学し、現地でオランダ人女性と結婚。同国のウラン濃縮に関する研究開発企業で働いた後、76年に帰国した。

(毎日新聞データファイル2004年2月14日)

例(1)は目的語を表すヲ格名詞(前文)をとるので他動詞であり、例(2)~(4)は目的語を表すヲ格名詞をとらないので自動詞である。内部構造から見れば、例(1)の「全文削除する」と(2)の「辞意表明する」は「目的語を表すヲ格名詞(全文、辞意)+他動詞」、例(3)の「地盤沈下する」と(4)の「欧州留学する」は「主体変化を表すガ格名詞(地盤)+自動詞」、「到着点を表すニ格名詞(欧州)+自動詞」の組み合わせで複合している。つまり、N-VNタイプの四字漢語動詞の自他とその内部構造の自他との関係から見ると、N-VNタイプの四字漢語動詞にはさなまぎな類型が存在することが分かるのである。

すでに述べたように、四字漢語動詞についての研究は、従来、主にその内部構造を論じているが、N-VNタイプの四字漢語動詞の自他とその内部構造の自他との関係を論じるものは管見のかぎり見当たらない。そのため、本稿はN-VNタイプ

の四字漢語動詞の自他とその内部構造の自他との関係を明らかにすることを目的とする。

1. 研究対象

漢語動詞とは、一般的に(G)～(J)のように「漢語＋する」という語形を持つ、いわゆる「漢語サ変動詞」のことである。

(G) 一字漢語動詞：愛する、制する、…

(H) 二字漢語動詞：食事する、過熱する、…

(I) 三字漢語動詞：再検討する、過熱化する、…

(J) 四字漢語動詞：法律改正する、通勤通学する、…

本稿は、(J)のような「(2字漢語＋2字漢語)＋する」の形の四字漢語動詞を研究対象とする。なお、「切齒扼腕する」のように内部構造を分けることが困難なもの、例(5)に示したように、後項要素が自他両用動詞²⁾であるものは研究対象から除外する。

(5)

a. 東京都は回収制度が導入された昨年10月からパソコンをゴミとして回収することを全面停止し、回収義務者が明確でないパソコンの回収は同協会が請け負っている。

(毎日新聞データファイル2004年1月28日)

b. 府などの推測では、大地震で公共交通機関が全面停止すると、大阪市内だけで約203万人が足止めされ、多くが徒歩での帰宅を余儀なくされる。(毎日新聞データファイル2004年3月31日)

また、本稿では小林(2004)の分類に従い、主に「法律改正する」のようなN-VNタイプの四字漢語動詞を考察する。「通勤通学する」のようなVN-VNタイプの四字漢語動詞、「空中爆発する」のようなADJ-VNタイプの四字漢語動詞についての考察は別稿を用意したい。

2. 先行研究

これまでN-VNタイプの四字漢語動詞を論じる研究は、管見の限りでは非常に少ない。以下、先行研究として小林(2004)、野島(2006)をとりあげる。

小林(2004)は、N-VNタイプの四字漢語動詞の内部構造について考察している。小林(2004)は、例(6)と(7)に示したように、N-VNタイプの四字漢語動詞の中には、前項要素(法律)と後項要素(改正する)が複合して目的語を表すヲ格名詞が一つ減る四字漢語動詞(法律改正する)と、前項要素(全文)と後項要素(削除する)が複合して目的語を表すヲ格名詞が減らない四字漢語動詞(全文削除する)があると述べている。

(6)しかし、いまの段階で、出店調整の必要がないように法律改正すれば大型店の出店ラッシュを招き流通秩序が乱れることも予想される。(小林2004:216) (朝日新聞1988年11月4日)

(7)また、「労働者階級の前衛政党」「社会主義革命」などの表現がある前文を全文削除する党規約改定を全会一致で、有事の際の自衛隊活用の容認などを盛りこんだ大会決議を賛成多数でそれぞれ採択した。(=例(1))

小林(2004)の分類をまとめると、表1ようになる。

表1 小林(2004)の分類

タイプⅠ		
他動詞	－	名詞編入
(法律を改正する)	－	自動詞 (法律改正する)
タイプⅡ		
他動詞	－	名詞編入
(全文を削除する)	－	他動詞 (全文削除する)

野島(2006)は、四字漢語動詞を4つのタイプに分けて考察している。第1タイプは「自主運営」のように修飾機能をもつ副詞と動詞とからなるもの、第2タイプは「自己描写」のように後項要素(描写する)が動詞の機能を想定し、前項要素(自己)と項関係で複合するものである。第3タイプは「比較検討」のように「比較・検討する」と見なされるもの、第4タイプは「切齒扼腕」のように熟語として使われるものである。野島(2006)の分類をまとめると表2(次頁)のようである。

表2 野島（2006）の分類

タイプ	四字漢語動詞	元になる句構造
第1タイプ	自主運営	自主的に運営する
第2タイプ	自己描写	自己を描写する
第3タイプ	比較検討	比較・検討する
第4タイプ	切齒扼腕	

上記から分かるように、小林（2004）、野島（2006）は、N-VNタイプの四字漢語動詞の自他とその内部構造の自他との関係を詳しく述べていない。そのため、本稿では、小林（2004）、野島（2006）を踏まえ、N-VNタイプの四字漢語動詞の自他とその内部構造の自他との関係を考察する。

3. データの収集方法

本稿で分類に用いる用例は、主に毎日新聞データファイル2003年と2004年から抽出したものである。

N-VNタイプの四字漢語動詞の収集方法については、まず、Windows OSの環境においてスクラエディタを用い、正規表現で四字漢語動詞を抽出した（[一-籲][4](し|す|せ)）。次に、抽出したデータには、VN-VNタイプの四字漢語動詞、ADJ-VNタイプの四字漢語動詞、「年賀状残し」のような動詞ではないものがあるので、Excelで処理して本稿の研究対象とならないものを削除した。

4. 四字漢語動詞の自他の判定基準

従来、動詞の自他については盛んに論じられている。本章では、まず、これまでの動詞の自他に関する研究を概観する。以下、和語動詞の自他を論じるもの（松下1923、奥津1967、森田1987）と、漢語動詞の自他を論じるもの（影山1996、張2014）に分けて年代順で見えていく。次に、本稿における四字漢語動詞の自他の判定基準を述べる。

松下（1923）は、動詞の自他について(K)のように相対のある動詞を「対称的自他動」、(L)のよ

うに相対のない動詞を「単独的自他動」と呼んでいる。

自動	他動
(K) 花が散る	風が花を散らす
木が枯れる	虫が木を枯らす
山が見える	人が山を見る
本が出る	本屋が本を出す
(L) 人が死ぬ	賊が人を殺す
本が出来る	学者が本を拵える
子供が学校へ這入る	親が子供を学校へ入れる

松下（1923：18）

また、松下（1923）は、他動詞を(M)のように目的語をとるもの（「実質的他動」）、(N)～(Q)のように目的語をとらないもの（「形式的他動」）に分けている。

「実質的他動」

(M)風が砂を吹く（吹き飛ばす）、風が草を吹く（吹き）…

「形式的他動」

- (N)「進行的形式他動」（空を吹く、道を行く、…）
 (O)「出発的形式他動」（東京を立つ、親を離れる、…）
 (P)「時間的形式他動」（今日を遊ぶ、三年を住む、…）
 (Q)「後件的形式他動」（行きや別れむ、恋しきものを、…）

松下（1923:23-25）

奥津（1967）は、動詞の自他の定義について以下のように述べている。

動詞の自・他は、文構成の上で、自動詞は目的語をとらず、他動詞は目的語をとる、という著しいちいのあることを認めなければならない。そして、名詞につく格助詞の「ヲ」が、目的語の目印となる。

（奥津 1967:47）

奥津（1967）は、上記の定義によって例(8)の「安宅ノ関ヲ通ツタ」のように、ヲ格名詞（安宅

ノ関)をとるが、目的語ではなく通過点として機能する場合は自動詞、例(9)の「弁慶ヲ通シタ」のように、目的語を表すヲ格名詞(弁慶)をとる場合は他動詞であるとしている。

(8) 弁慶ハ安宅ノ関ヲ通ツタ。
(奥津1967:47)

(9) 富樫ハ弁慶ヲ通シタ。
(奥津1967:48)

森田(1987)は、動詞の自他の定義について以下のように述べている。

だいたい動詞の自他と言っても、日本語の場合、それほど明確な線が引けるものではない。他の対象に対しての働き掛けが他動詞で、その主体自体の働きが自動詞だと一応は説明する。(森田1987:155-156)

今日、その動詞が自動詞か他動詞かを弁別する一つの目安として、ヲ格の目的語を取り得るか否かということが判定基準となっている。(森田1987:157)

森田(1897)は、上記の定義のように、目的語を表すヲ格名詞をとりうるか否かによって動詞の自他を区別している。例えば、「食べる」は「ご飯を食べる」のように目的語を表すヲ格名詞(ご飯)をとるので他動詞、「飛ぶ」は「空を飛ぶ」のように「移動」や「起点」を表すヲ格名詞(空)をとるので自動詞であるとしている。

影山(1996)は、漢語動詞の自他を(R)の「自動詞のみ」、(S)の「他動詞のみ」、(T)の「自他両用動詞」の3種類に分けている。

(R)自動詞のみ

事故が発生する、地価が下落する、水が蒸発する、株価が暴落する、ビルが乱立する

(S)他動詞のみ

ビルを爆破する、通行人を殺害する、郊外を緑化する、顔を整形する、主張を正当化する

(T)自他両用動詞

拡大する、縮小する、変形する、完備する、完成する、回転する、展開する、解散する

影山(1996)は、自他の判定基準は恣意的に決まっているのではなく、意味的要素によって定められると説明している。例えば、「水が蒸発する」では、その事態が自然に起こるので自動詞として機能し、それに対して「主張を正当化する」では、その行為を行う動作主が必要であるから他動詞として機能するのである。影山(1996)では自他動詞の構造的な特徴を述べていないが、挙げられた例から見れば、「他動詞のみ」は一般的に目的語を表すヲ格名詞をとるので他動詞であり、それに対し「自動詞のみ」は「*水を蒸発する。」のように、目的語を表すヲ格名詞(水)をとると非文になるので自動詞である。つまり、目的語を表すヲ格名詞をとるか否かによって動詞の自他を判断しているということである。

張(2014)は、漢語動詞の自他の定義について、例(10)の「増強する」は目的語を表すヲ格名詞(生産能力)をとるので他動詞として使われているのに対し、例(11)の「高騰する」は目的語を表すヲ格名詞をとらないので自動詞として使われているとしている。また、「面会する」のようにト格名詞をとるもの、「就任する」のようにニ格名詞をとるものは、意味から見ると、その前に来る名詞に対する働きかけが弱いので自動詞に近いと述べている。

(10)シャープは買収を通じて主要部品を内製化し、液晶パネルの生産能力を増強する。(張2014:24)

(読売新聞2000年2月16日)

(11)その後、省エネや代替エネルギーの開発が進み、産油国の影響力は低下したものの、最近もパレスチナ情勢の緊迫で原油が高騰し、景気回復への悪影響が懸念されている。(張2014:24)

(読売新聞2000年10月16日)

以上をまとめると、先行研究では、日本語の動詞を「ヲ格の有無」と「ヲ格の意味」の2つの観点から自他動詞に分類していることがわかる。

「ヲ格の有無」について、松下(1923)、影山(1996)、張(2014)はいずれも「ヲ格」がある場合は他動詞と判断できず、そのヲ格の意味を見なければならぬと主張している。この主張

は、ヲ格がない場合は自動詞になるという前提に立っているといえる。

「ヲ格の意味」について、松下（1923）、奥津（1967）、森田（1987）はいずれも「ヲ格」の意味に注目し、目的語を表すヲ格名詞をとるのが他動詞、目的語を表すヲ格名詞をとらないものが自動詞であると主張している。

これらの点を踏まえ、本稿で使用する自他動詞の判定基準は次のようになる。

原則1 ヲ格の有無

動詞の自他を判定するには、ヲ格をとるか否かがもっとも重要な手がかりである。そのため、本稿ではヲ格をとらない場合を自動詞とする。

原則2 ヲ格の意味

ヲ格をとる動詞は目的語を表すヲ格名詞をとる動詞と、目的語を表すヲ格名詞をとらない動詞に分けることができる。本稿では先行研究の指摘に従い、前者を他動詞、後者を自動詞とする。

5. 漢語の品詞性

水野（1987）は漢語の品詞性を次の5種類に分類している。

(U)体言類……格助詞「ガ」を伴って文の要素となる。(ex.近代・科学)

(V)相言類……「な」を伴って連体修飾成分となる。あるいは体言類・用言類・副言類に属さず「の」を伴って連体修飾成分となる。(ex.優秀・最後)

(W)用言類……「する」を伴ってサ変動詞となる。(ex.計画・注意)

(X)副言類……そのまま連用修飾成分となる。(ex.全然・絶対)

(Y)結合類……上に挙げた四つの類のどれにもあてはまらず、必ず接辞等と結合して用いられる。(ex.積極・合理)

水野（1987：63）

本稿は水野（1987）の分類を参考にし、漢語の品詞性を判断する。例えば、「地盤」、「生徒」などの「する」を付けることができないものを名詞的要素とする。また、漢語は複数の品詞性を持つ

つのが一般的なので、複数の品詞性を持つ場合は文中で（複合語の中で）どのように使われるかによってその品詞性を判断する。例えば、「自宅」、「事前」などは「自宅で」、「事前に」と言い換えられ、文中で省略しても文の意味が変わらないので、名詞的要素ではなく付加詞的要素とする。また、「爆発」、「複製」などは「する」を付けて言い換えられるので動詞的要素とする。

6. N-VNタイプの四字漢語動詞の分類

影山（1980）は、N-Vタイプの和語複合動詞について名詞編入の関与は形態面ばかりでなく意味的・構文的考察からも証明されると述べ、次の6種類に分類している。

(ア)主語 (NがV)

例：気づく、波立つ、傷つく、息詰まる、…

(イ)直接目的語 (NをV)

例：手間取る、年取る、骨折る、名付ける、…

(ウ)到着点 (NにV)、方向 (NへV)

例：片寄る、遠のく、旅立つ、…

(エ)静止位置 (NにV、NでV)

例：巣ごもる、背負う、夢見る、手挟む、…

(オ)出発点 (NからV)

例：天下る、巣立つ、手離す、…

(カ)手段 (NでV)

例：くしけずる、手渡す、爪先立つ、指さす、…

本稿では、上記の分類を参考にし、N-VNタイプの四字漢語動詞における前項要素と後項要素の関係から、N-VNタイプの四字漢語動詞は次のような種類が見られると考える。

(キ)前項要素が後項要素の主語を表すタイプ (NがV) 例：地盤沈下する、意気消沈する、…

(ク)前項要素が後項要素の目的語を表すタイプ (NをV) 例：意思表示する、気分転換する、…

(NにV) 例：事業着手する、外交努力する、…

(ケ)前項要素が後項要素の到着点を表すタイプ (NにV) 例：日本留学する、欧州留学する、…

上記の(ク)と影山の(イ)には、やや異なるところがある。本稿では目的語をとるものにはヲ格目的語の場合と二格目的語の場合があると見るから

である。例えば、「外交努力する」と「事業着手する」は「外交に努力する」、「事業に着手する」の組み合わせで複合した四字漢語動詞である。この場合、前項要素（外交、事業）を省略すると、文の意味が不完全になるため、「外交」と「事業」は付加詞的要素ではなく、目的語を表す名詞的要素であると考えられる。このように処理すると、4章で述べた原則1に抵触するように見える。しかし、これらは形態的には自動詞であるが、意味から見ると他動詞である。そのため、本稿ではこのようなものを他動詞として扱う。

7. 考察

N-VNタイプの四字漢語動詞とは、「実態調査する」、「辞意表明する」などのような名詞的要素（以下、前項要素）と動詞的要素（以下、後項要素）で構成されるものである。前章で述べたように、このタイプの四字漢語動詞には前項要素が後項要素の主語を表すタイプ、前項要素が後項要素の目的語を表すタイプ、前項要素が後項要素の到着点を表すタイプがある。以下、それぞれのタイプについて述べる。

7.1. 前項要素が後項要素の主語を表すタイプ

本節では、「地盤沈下する」、「意気消沈する」などのような前項要素が後項要素の主語を表す四字漢語動詞を見ていく。

(12)ただ抵抗勢力の側はマスコミに叩かれ続け、候補者を出しても勝てそうにないことから、全く意気消沈している。

（毎日新聞データファイル2003年7月28日）

(13)その黒い城の代表格が4つ目のお薦め、松本城。「低湿地に造ったため、石垣が高過ぎると重みで地盤沈下する。

（日本経済新聞夕刊2017年7月8日）

本稿の自他の判定基準に従うと、例(12)は動作主を表すガ格名詞（抵抗勢力の側）、例(13)は主体変化を表すガ格名詞（松本城）をとる自動詞である。内部構造から見れば、例(12)は「意気」と「消沈する」、例(13)は「地盤」と「沈下する」の組み合わせで複合した四字漢語動詞である。例(12)の

「意気消沈する」と(13)の「地盤沈下する」は、それぞれ「抵抗勢力の側の意気が消沈する」、「松本城の地盤が沈下する」に言い換えることができる。このように、前項要素が文の主語の一部であるという関係があることがわかる。つまり、「文の主語が[N+VNする]」（「抵抗勢力の側が意気消沈する」、「松本城が地盤沈下する」）は「文の主語のNがVNする」（「抵抗勢力の側の意気が消沈する」、「松本城の地盤が沈下する」）に言い換えることができる関係である。例えば、例(12)の「抵抗勢力の側の意気が消沈する」と(13)の「松本城の地盤が沈下する」の場合、文の主語の一部である前項要素（意気、地盤）が後項要素（消沈する、沈下する）と複合して「抵抗勢力の側が意気消沈する」、「松本城が地盤沈下する」となるため、四字漢語動詞の自他は後項要素の自他で決まるということになる。次に、前項要素が後項要素の目的語を表すタイプについて述べる。

7.2. 前項要素が後項要素の目的語を表すタイプ

本節では、「辞意表明する」、「事業着手する」などのように前項要素が後項要素の目的語を表す四字漢語動詞を見る。以下、ヲ格目的語の場合とニ格目的語の場合に分けて考察する。まず、ヲ格目的語の例を見る。

(14)

a.大阪、京都、兵庫3府県の私立高校で10日、今春の入学試験が始まった。大阪府内ではこの日、生徒募集する91校のうち89校が実施、12日までに全校で実施される。

（毎日新聞データファイル2003年2月10日）

b.プロ野球・阪神の元監督、村山実さんがそうだった。阪神の前回優勝（85年）の3年後から指揮を執った村山さんは、89年秋、試合後の球場で突然、辞意表明した。（=例(2)）

(15)また、「労働者階級の前衛政党」「社会主義革命」などの表現がある前文を全文削除する党規約改定を全会一致で、有事の際の自衛隊活用の容認などを盛りこんだ大会決議を賛成多数でそれぞれ採択した。（=例(1)）

本稿の自他の判定基準に従うと、例(14)は自動

詞、例(15)は他動詞である。内部構造から見れば、例(14)は「生徒」と「募集する」、「辞意」と「表明する」、例(15)は「全文」と「削除する」の組み合わせで複合した四字漢語動詞である。例(14)の「生徒募集する」と「辞意表明する」は前項要素が後項要素の目的語として編入されて自動詞になる。それに対し、例(15)の「全文削除する」は前項要素が後項要素の目的語として編入されると考えられるが、他動詞になる。では、なぜ同じ構造を持っているのに、例(14)の「生徒募集する」と「辞意表明する」は自動詞、例(15)の「全文削除する」は他動詞になるのか。これは、例(15)では目的語を表すヲ格名詞（前文）が四字漢語動詞の前項要素（全文）に対してより詳細な情報を加え、「余剰性」に反していないからだと考えられる。

「余剰性」(redundancy) について仁田 (1980) は、「*馬から落馬する。」のような文は不要になったもの（馬から）を含むため非文になるとする。その理由は「余剰性」に反しているからである。ただし、意味が重複していても「余剰性」に反していない場合もある。影山 (1999) は「私鉄各社がそろって運賃を値上げした。／値下げした。」のような文ではヲ格名詞（運賃）が「値」に対してより詳細な情報を補足するため、もう一つの目的語を表すヲ格名詞（運賃）をとることができる」と述べている。つまり、例(15)の場合も同じように、ヲ格名詞（前文）が前項要素（全文）に対してより詳細な情報を補足するため、もう一つの目的語を表すヲ格名詞をとることができるのである。

上記の「余剰性」により、例(14)の「生徒募集する」と「辞意表明する」のように、前項要素（生徒、辞意）が後項要素（募集する、表明する）の目的語として編入される場合、四字漢語動詞はもう一つの目的語を表すヲ格名詞をとることができないため、自動詞になる。ただし、例(15)ではヲ格名詞（前文）が前項要素（全文）に対してより詳細な情報を加え、「余剰性」に反していない場合、前項要素（全文）が後項要素（削除する）の目的語として編入されたとしても、もう一つの目的語を表すヲ格名詞をとることができる。つまり、「N1（前文）のN2（全文）をVNする

（削除する）」の場合、N1がN2の情報を限定し、より詳細な情報を与える場合は「N1を[N2+VN]する」が成立するのである。

以上で述べたことをまとめると、以下のようなものである。前項要素が後項要素の目的語として編入される場合、四字漢語動詞はもう一つの目的語を表すヲ格名詞をとることができないため、自動詞になる。ただし、ヲ格名詞が前項要素に対してより詳細な情報を加え、「余剰性」に反していない場合、四字漢語動詞はもう一つの目的語を表すヲ格名詞をとることが可能になるため、他動詞になる。

次に、二格目的語の場合を述べる。

(16)

a.和歌山市が旅田卓宗・前市長（57）時代に事業着手して建設中の「夢舞台万葉不老館（仮称）」用地を巡る不明朗取引事件で、旅田前市長が、市に用地を転売した「吉永建設」（和歌山市）社長、木下吉隆被告（39）＝詐欺罪などで起訴＝から、土地取引で便宜を図った謝礼として現金数百万円を受け取った疑いが強まり、和歌山県警捜査2課は6日、旅田前市長を収賄容疑で逮捕、木下被告を贈賄容疑で再逮捕した。

（毎日新聞データファイル2003年1月6日）

b.イラクの大量破壊兵器問題は国際社会の平和と安全に対する脅威である。イラクは12年間、安保理決議を履行せず、国連の権威に挑戦している。日本は問題の平和的解決のため、イラクが能動的に疑惑を解消し、すべての安保理決議を履行するよう外交努力する。

（毎日新聞データファイル2003年2月19日）

本稿の自他の判定基準に従うと、例(16)は自動詞である。内部構造から見れば、「事業」と「着手する」、「外交」と「努力する」の組み合わせで複合した四字漢語動詞である。このタイプの前項要素（事業、外交）は省略すると文の意味が不完全になるため、付加詞的要素ではなく目的語を表す名詞的要素である。例えば、「和歌山市が着手する」だけでは文の意味が不完全であるため、「和歌山市が事業に着手する」のように、前項要素（事業）は後項要素（着手する）の目的語とし

て考えられる。つまり、前述したように、前項要素（事業、外交）が後項要素（着手する、努力する）の目的語として編入され、四字漢語動詞はもう一つの目的語を表すヲ格名詞をとることができないため、自動詞になる。次に、前項要素が後項要素の到着点を表すタイプについて述べる。

7.3. 前項要素が後項要素の到着点を表すタイプ

本節では「欧州留学する」、「海外出張する」などのような前項要素が後項要素の到着点を表す四字漢語動詞を見ていく。

(17)

a. 博士は1935年インド中部ボパールに生まれ、52年に家族とともにパキスタンのカラチへ移住した。大学卒業後、欧州留学し、現地でオランダ人女性と結婚。同国のウラン濃縮に関する研究開発企業で働いた後、76年に帰国した。

(=例(4))

b. 総務政務官である平沢氏が所管大臣の許可なしで海外出張したことは政務官規範に違反するため、政府は事実関係を確認したうえで処分を検討する。

(毎日新聞データファイル2004年4月2日)

本稿の自他の判定基準に従うと、例(17)は自動詞である。内部構造から見れば、例「欧州留学する」と「海外出張する」は「欧州」と「留学する」、「海外」と「出張する」が複合した四字漢語動詞である。このタイプの前項要素（欧州、海外）は省略すると文の意味が不完全になるため、付加詞的要素ではなく到着点を表す名詞的要素である。例(17)に示したように、前項要素（欧州、海外）と後項要素（留学する、出張する）が複合し、四字漢語動詞はもう一つの目的語を表すヲ格名詞をとることができないため、自動詞になる。つまり、このタイプの四字漢語動詞の自他は後項要素の自他で決まるということになる。例えば、後項要素（留学する、出張する）が自動詞であるため、例(17)の「欧州留学する」と「海外出張する」も自動詞になる。

8. まとめと今後の課題

本稿では、N-VNタイプの四字漢語動詞の自他とその内部構造の自他との関係を考察した。結果は以下の通りである。

日本語は「右側主要部の規則³⁾」(Righthand Head Rule)であるため、前項要素が後項要素の主語を表すタイプ、前項要素が後項要素の到着点を表すタイプでは、この規則により、N-VNタイプの四字漢語動詞の自他が後項要素の自他で決まると考えられる。しかし、前項要素が後項要素の目的語を表すタイプで見たように、前項要素が後項要素の目的語として編入される場合、N-VNタイプの四字漢語動詞はもう一つの目的語を表すヲ格名詞をとることができないため、自動詞になる。ただし、ヲ格名詞が前項要素に対してより詳細な情報を加え、「余剰性」に反していない場合、N-VNタイプの四字漢語動詞はもう一つの目的語を表すヲ格をとることが可能になるため、他動詞になる。

本稿では、新聞に現れた四字漢語動詞のみを対象にしたが、新聞に特有の表現もあると思われるため、小説や雑誌などからも用例を収集して分析する必要がある。

また、例(18)と(19)に示すような、VN-VNタイプの四字漢語動詞、ADJ-VNタイプの四字漢語動詞の自他とその内部構造の自他との関係についての考察は今後の課題としたい。

(18) 府内の児童相談所を指導監督する大阪府家庭支援課も、センターの対応に不備がなかったかどうか調査することを決めた。虐待について、迅速な対応や早期発見が可能となるような対策作りも急ぐ方針。

(毎日新聞データファイル2004年1月26日)

(19) 利権政治家と背德的官僚は、不正に利得を得ようとしている不公正な業者と結託しています。こうした関係を明らかにし、政治家の不正を根絶するために、企業・団体献金を全面公開します。

(毎日新聞データファイル2003年10月6日)

注

- 1) 本稿では、「ADJ」は「付加詞的要素 (ad-junct)」の略である。(以下同様)
- 2) 本稿では、自他両用動詞とは「車のエンジンが停止した」、「私は車のエンジンを停止した」が示したように、自動詞としても他動詞としても使われるものを指す。
- 3) 竝木 (1985)、影山 (1993)、小林 (2004) などによると「右側主要部の規則」(Righthand Head Rule) とは、合成語では主要部が右側に位置するということを指す。

参考文献

- 庵功雄 (2008) 「漢語サ変動詞の自他に関する一考察」, 『一橋大学留学生センター紀要』 11, pp.47-63.
- 石井正彦 (1987) 「漢語サ変動詞と複合動詞」, 『日本語学』 6(2), pp.46-59.
- 王淑琴 (2012) 「「他+自」複合動詞の派生条件: 他動性による説明」, 『台湾日語教育學報』 18, pp.203-232.
- (2015) 「和語の自他両用動詞について」, 『政大日本研究』 12, pp.67-98.
- (2016) 「漢語の自他両用動詞の構文的タイプ」, 『台湾日語教育學報』 27, pp.135-164.
- 奥津敬一郎 (1967) 「自動化・他動化および両極化転形: 自・他動詞の対応」, 『国語学』 70, pp.46-66.
- 影山太郎 (1980) 『語彙の構造: 日英比較』 松柏社.
- (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房.
- (1996) 『動詞意味論: 言語と認知の接点』 くろしお出版.
- (1999) 『形態論と意味』 くろしお出版.
- (2011) 『名詞の意味と構文: 日英対照』 大修館書店.
- (2013) 「語彙的複合動詞の新体系: その理論的・応用的意味合い」, 影山太郎編『複合動詞研究の最先端: 謎の解明に向けて』, pp.3-46, ひつじ書房.
- 小林英樹 (2004) 『現代日本語の漢語動名詞の研究』 ひつじ書房.
- 佐藤琢三 (2005) 『自動詞文と他動詞文の意味論』 笠間書院.
- 阪倉篤義 (1996) 『語構成の研究』 角川書店.
- 朱京偉 (2015) 「四字漢語の語構成パターンの変遷」, 『日本語の研究』 11(2), pp.50-67.
- 張志剛 (2014) 『現代日本語の二字漢語動詞の自他』 くろしお出版.
- 張善実 (2010) 「V-N型の漢語動詞の語構成と自他」, 『言葉と文化』 11, pp.155-164.
- 陳世娟 (2012) 「『名詞+動詞連用形』複合語の特徴及びその使用実態」, 『銘傳日本語教育』 15, pp.96-120.
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語: 言語類型論から見た日本語』 くろしお出版.
- 竝木崇康 (1985) 『語形成』 大修館書店.
- 仁田義雄 (1980) 『語彙論的統語論』 明治書院.
- 野島啓一 (2006) 「四字動詞の研究」, 『北九州市立大学文学部紀要』 72, pp.33-42.
- 野村雅昭 (1974) 「三字漢語の構造」, 『国立国語研究所報告』 51, pp.37-62, 国立国語研究所.
- (1975) 「四字漢語の構造」, 『国立国語研究所報告』 54, pp.36-80, 国立国語研究所.
- (1987) 「複合漢語の構造」, 水谷静夫編『朝倉日本語新講座 1 文字・表記と語構成』, pp.130-144, 朝倉書店.
- (1988) 「二字漢語の構造」, 『日本語学』 7(5), pp.44-55.
- (1998) 「現代漢語の品詞性」, 東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集編集委員会編『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』, pp.128-144, 汲古書院.
- (1999) 「サ変動詞の構造」, 森田良行教授古稀記念論文集刊行会編『日本語研究と日本語教育』, pp.1-23, 明治書院.
- 平尾得子 (1990) 「サ変動詞をめぐる」, 『待兼山論叢』 24, pp.57-73.
- 松下大三郎 (1923) 「動詞の自他被使動の研究」, 須賀一好・早津恵美子編『動詞の自他』, pp.13-40, ひつじ書房.

水野義道 (1987) 「漢語系接辞の機能」, 『日本語学』 6(2), pp.60-69.
宮地裕 (1973) 「現代漢語の語基について」, 『語文』 31, pp.68-80.
森岡健二 (1994) 『日本文法体系論』 明治書院.
森田良行 (1987) 「自動詞と他動詞」, 山口明穂編『国文法講座 第6巻 (時代と文法: 現代語)』, pp.155-180, 明治書院.
—— (2000) 「自他両用動詞から自他同形動詞へ」, 『早稲田日本語研究』 8, pp.63-74.
山田孝雄 (1940) 『国語の中に於ける漢語の研

究』 宝文館.

楊高郎 (2007) 「自動詞・他動詞用法に意味的制限を持つ自他両用動詞について: 二字漢語動詞を中心に」, 『筑波日本語研究』 12, pp.65-88.

—— (2009) 「国語辞典における自他認定について: 自他両用の二字漢語動詞を中心に」, 『筑波日本語研究』 14, pp.75-95.

由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語: モジュール形態論から見た日英語の動詞形成』 ひつじ書房.

(2019年3月15日受付)